

学ぶ喜び

2025.10.17
VOL.13

一仲間とともにつながる学校へー

ここ数年間で変化した意識

数年前、私自身、筆記具による手書きの学習こそが大切であり、タブレットを用いた学習は「学力低下に直結するのではないか」という不安を抱えていました。学習のために貸与された端末が「おもちゃ」と化すのを見て、「やはりICT利用は学習の妨げだ」と結論づけ（そうになった方は私だけではないと思います。しかし、冷静に振り返れば、導入当初、私たち教員・家庭といった大人側がICT機器の「正しい使い方」を子どもたちに丁寧に伝えきれていたと言えるでしょうか。子どもたちも、私たち大人も、同じく手探りで「うまく使えなかった」のが実情ではなかったかと思います。

「使い方」の探究と活用の意義

導入から数年が経ち、もはや「タブレットのない世界」には戻れないと実感しています。この経験を通じて得た結論は、問題は「道具」そのものではなく「使い方」にあるということです。もちろん、手書きが不要になったわけではありません。通信や手紙など、ここぞという場面での手書きの価値は残ります。しかし、ICT、特にクラウドを活用した学習は、従来の授業の限界を大きく超えてくることを最近感じています。

授業を革新するクラウドの力

タブレット活用の真の意義は、「調べ物をする」という単純な効率化にとどまりません。それは、教室全体を「協働的な学びの場」に変革すること。従来の授業では、教員がところどころ質問し、生徒が答え、また授業のまとめでは意見を述べられるのはせいぜい2〜3人。教師がそれをまとめて板書という形が多かったと思います。しかし、ロイロの共有ノート（ホワイトボードに全員が意見を書いていく、いわゆる「白紙共有」）やCanva等のクラウドを介した授業が展開できると、生徒35人、全員の意見が、1つの画面上にリアルタイムで集約されます。さらに、集まった35人分の意見は、生成AIなどのツールによって瞬時にカテゴリーズ（KJ法的な整理）することも可能です。これにより、班活動という枠を超え、教室全体での深い議論と協働的な学びが展開可能になります。

私たち授業者に求められるもの

ICT活用の意義が「協働的な学びの展開」にあるとすれば、現状「調べ物」で終わらせている活用は、そのポテンシャルを活かしきれていないことになります。「どう学びに活かすか」は、共有ノートやCanvaのような新たなツールを得た今、私たち授業者自身の発想と指導力にかかっていると言えるでしょう。生徒と共に「どう扱うか」を考えていきたいと思います。

ICTの成熟度4段階とめざす姿

鉛筆やノートのように、ICT機器の存在が意識されなくなるほど
自然に学びの道具として溶け込んでいる状態。
子どもたちが顔を見て対話する時間を確保するための戦略的ツールとしての位置づけ。

4

利活用：他教科や実生活に応用する段階

例：デジタルポートフォリオで振り返り、
探究活動に活かす

3

活用：学習効果を高めるために使う段階

例：協働学習で共同編集ツールを使う

2

使用：単なる道具として使う段階

例：電子黒板を資料提示に使う

1

利用：特定の目的のために使う段階

例：調べ学習で検索機能を使う

デジタル学習基盤の活用により、生徒が中学校の授業で、小学校時代の自分の学習成果（探究の振り返りなど）をクラウド上で参照しながら学びを深めるなど、9年間の「学びの軌跡」をデータで可視化し、学びをつなぐことが可能になります。これは、評価の焦点が「知識量」から「知識の質（活用力）」へと移る、次期指導要領の方向性と一致します。



学習の基盤となる資質・能力としての情報活用能力の育成

